

荒木山通信

2019年12月

第7号

荒木山の古墳
を顕彰する会

北房の古代が熱い！

十月のよく晴れた日、久しぶりに「そふづぶう古墳」を訪ねた。山之城集落の一番奥に在る蜂谷家の傍に軽トラを止めて坂道を上った。登り口にはイノシシ除けのトタンが設置されており、それを跨いで行くと、十分ほどで古墳の北側に着いた。一帯は雑木の疎林で、道から見上げると古墳の稜線がよく見える。何気なしに左の谷を見下ろすと底にブルーシートを敷き詰めたと思われる風景が見える。私は一瞬驚いたが、それが澄み切った秋の空を映した井堀池の水面であることに気づいた。

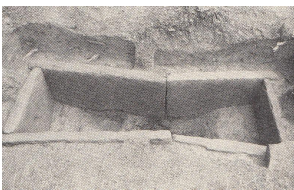
「そふづぶう古墳」は、荒木山の二基の古墳に続いて築かれた全長四九mの前方後円墳である。昭和六十三年（一九八八）年、墳丘測量の後、盗掘を受けていた後円部頂の箱式石棺内の調査がなされた。一m×一・五m程の篩を立木に吊し、スコップで石棺内の土を少しずつ篩にかけていた。作業をしている二人の男性の頭には白いタオルが巻かれていた。「蚊の対策には、白いタオルが一番です。」と平井勝さんが白い歯を見せてほほ笑んだ。この調査では、乱獲土の中から管玉二点が出土した。なお、北房町史には「小破片であるが、円筒埴輪のほかに朝顔形埴輪や形象埴輪も認められ、古墳築造時期を考えると上の手がかりになった。」と記されている。また、「赤い土管状の物が並んでいた。」という地元住民の話もあり、北房の盆地内で埴輪が置かれていたことが

分かる唯一の古墳であろう。古墳の名称が珍しいので気になっていた。

この度、真庭市教委の新谷主幹から現地の図面が届き、古墳を含む一帯の小字名が「そふづぶう」であることが判明した。なお、表記の仕方は次のとおり三種である。「ソフツ風呂」が十二筆、「そふづぶう」が七筆、「添水風呂」が三筆であった。

また、かつて古墳の近くに住んでいた人々から「そうずぶろ」と言っていたとの証言もある。「う」と「ろ」は判別が難しく、筆字となるとどちらにも読めることから、命名の際間違ったものと思われる。

さて、首長墳が荒木山に続いてこの地に築かれたのは何故か。次の代には盆地の中央で、荒木山近くに立一号墳（全長約八〇m）が築かれていて、考えていると眠れなくなる。



（箱式石棺）北房町史より

全国の古代史ファンを 北房に呼びませんか

北房には、古墳、遺跡が多数ありますが、大変残念なことに、どこに何があるのか、地元の方でさえよく知らないというのが実情ではないでしょうか。三年程前に北房に帰ってきた私も同じです。

今年の五月、小殿に行ってみました。地元の方に尋ねても、小殿遺跡という名前さえご存じありませんでした。また、立一号墳を見ようと、二人の地元の年配の方に尋ねたのですが、ここでも古墳があることさえご存じありませんでした。その後、英賀廃寺へ行くのも一苦労でした。

もし、「北房の古墳・遺跡マップ」や道案内板があれば、それを頼りに誰でも行けます。たとえそこには畑しかなくとも、説明看板があれば、説明文を読みながら、遙か昔の風景を想像できます。

全国には、古墳時代をはじめとした古代史ファンが



（立一号墳：後円部）

想像以上にいます。北房には、古墳時代前期の箸墓古墳と同じ頃と推定される荒木山東塚古墳から、古墳時代終末期の大谷一号墳まで揃っています。まるで古墳の博物館です。さらに、倉敷市の榎築墳丘墓や西谷三号墓がある出雲市の中間に位置することを思えば、北房で弥生墳丘墓が発見されてもおかしくありません。とにかく興味が尽きない所です。ネット等を利用して全国に発信すれば、「西の明日香村」北房には、一年を通して多くの古代史ファンが訪れてくれるはずです。そのためにも、是非、マップ、道案内板、現地の説明看板等が欲しいものです。

（平城 元）

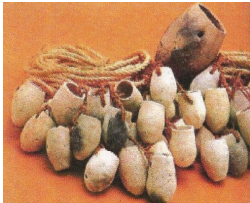


古代(弥生)人は、 すごい！

十一月二三日(土)、な
かつ陣屋で荒木山古墳を
顕彰する会の役員研修を行
いました。

役員一〇名が総社市埋蔵
文化財学習の館 平井典子
館長に「原始・古代人の暮
らし(弥生時代を中心とし
て)」について話していた
いただきました。(市教育委員
会の新谷主幹も参加して下
さいました。)

プロジェクトで遺跡か
らの出土品等を映され、古
代の稲作・漁労や狩猟・衣
服や住居・祭祀や音楽等、
古代人の暮らしの様子を具
体的に語られました。



(漁撈具：たこつぼ)



(木製のｽﾌｰﾝとﾌｵｰｸ)



(木製農具：直柄や曲柄の又鍬)

「昭和三〇年代の私たちの
生活や使っている道具等と
あまり違ってないのでは
・・(その後の高度経済成
長期を経て短期間にどん
どん変わっていきますが)」
中でも鳥取県の青谷上地
寺遺跡の木工品は素晴らし
く、人間国宝に「これほど
のものは作れない」と言わ
しめています。「昔の人は
すごい！」と皆が声をあげ
ました。弥生人のものづく
りのすごさ・素晴らしさを
感じた一時間でした。

(畦田正博)

石室がまだ残る？

荒木山古墳のナゾ解きへ

一歩前進か？ ～西塚調査完了！

北房公民館講座として市
内最古級の荒木山古墳のナ
ゾに迫る調査が、昨年度の
東塚に続き西塚古墳で、十
一月二十六日(火)～十二
月一日(日)の一週間に渡
って行われました。この調
査は、受講生自らが市教委
と同志社大学との支援を受
けて、最先端の機器で古墳
の形状や内部構造を探索し
たものです。



(レーザー探索)

調査は天候にも恵まれて
スムーズに進みました。
受講生の多くは昨年から
で、老眼が進み数値の読み
にくさを気にしなければ、



(磁気探索)

測量機器を覗く姿は板につ
いていましたし、ソリに積
んだ重いレーザー照射機器
を、古墳形状に沿って適度
な速度を維持しながら数人
で移動するチームワークは
絶妙でした。「習うより慣
れよ」の実践です。

鉄製の副葬品を探す磁気
探索は調査一番の魅力らし
く、機器を手放さない受講
生の姿も面白い。通常音「ピ
ッピッピッ」が、強く
速い異常音「ビビビビ」
に変わる瞬間、「おっ？」と
声が出て反応のある一点に

何度も照射。思わず近寄る
津村准教授(調査責任者)
や他の受講生。「埋葬物は浅
そうだ。」(こそとばかり手
で上土を少し取り除く。す
ると……)。結晶片岩の板
状石片で囲まれた四辺の真
ん中に鉄心の入ったコンク
リート製の三角点(国土調
査の基準点)が現れる。「な
あんだ！」とみんながつか
り。西塚古墳の後円部がに
ぎやかな笑い声に包まれ
ながら調査は無理なく進め
られ、完了しました。

調査終了に当たり津村准
教授からレーザー探索の分
析途中の画面を提示されて
「盗掘された石室の下に、
大きめの埋葬空間が残って
います。さらに直交する施
設らしき石の反応も見られ
ます。このまま放置すると
墳頂の崩壊が進み、取り返
しがつかなくなります。早
急な学術調査の必要があり
そうです。」と非常に興味
深くワクワクする話を聞け
ました。トレンチ調査が計
画されると荒木山古墳のナ
ゾ解きはさらに一歩前進す
ることでしょう。

(奥田健治)

亥どしの話

荒木山の古墳を顕彰する会
顧問 戸村 彰孝

今年令和の令和元年亥どし、西暦二〇一九年であった。戦後世代は西暦を好むが、年配の者は和暦に愛着をもつ。来年は十二支のトップ子、今年是最終ランナーの亥だから、バトンタッチの師走に亥にまつわる話をしようと思つて筆をとる。

一、昭和時代

今年還暦を迎えた人は、昭和三十四年亥どしの生まれ。この年は、皇太子と正田美智子さんのご成婚で国中がミツチーブームに沸いたものだ。

二、ちよつと昔の話
つい先月、上水田の郡神社を訪ねる機会があった。

本殿は、鎌倉時代以降たびたび改築されてきたと伝えられ、回廊の上には古色の絵馬が架けられている。基壇の四方には

十二支の動物を刻んだ見事な彫刻が並ぶ。北房町史によれば天正時代の作で桃山風の様式という。日光東照宮の彫刻に勝るとも見られる逸品である。十二支を動物に喩えることを十二生肖という。

子〓鼠・丑〓牛・寅〓虎・卯〓兔・辰〓龍・巳〓蛇・午〓馬・未〓羊・申〓猿・酉〓鶏・戌〓犬・亥〓猪
これは日本で、ベトナムでは水牛や猫・山羊などが登場するそうである。



(郡神社の十二支の彫刻：亥)

三、昔むかしの話
今から千五百年ほどの昔、欽明天皇十六年(五五五)は、亥どしであった。ヤマト朝廷は最高実力者の蘇我

稲目を派遣、吉備の国に白猪屯倉を設置した。百年ほど前から列島中西部に地名を冠した屯倉(穀倉をもつ朝廷直轄地)が設けられてきたが、白猪という動物の名称は大変珍しい。いろいろ調べてゆくと、どうやら古墳時代「五穀の豊穰を御歳神に祈願する祭祀で白猪・白馬・白鶏を生け贄として供えた」(古語拾遺)故事に由来があるらしいと分かってきた。

もう一つの特徴は、渡来人の子孫の力をかりて成人の戸籍(丁籍)をつくり、土地と人を直接支配下に入れる方式を初めてとったことであろう。

造山・作山古墳をつくった五世紀前半の吉備は、ヤマト朝廷に比肩する勢力を誇っていたが、吉備の反乱の度重なる失敗を境に劣勢に追い込まれてゆく。白猪屯倉の強引な設置もその一つの象徴と思えてならないのである。
白猪屯倉の本拠地については一部考古学者からの異

論はあるが、日本書紀や続日本記の分析から美作国大庭郡に比定する文献史学の主張が有力である。



(縄文後期の猪形土製品)

《弘前市》

【俳句】

巻き尺を四方に伸ばす 冬日和
古墳調査またも落ち葉に 足取る
盗掘の古墳と見ゆる 冬の霧
木枯をまともにうけし 荒木山
荒木山
時雨は通り過ぎにけり
(天野光暉)

令和元年度 後期の活動

本年度も荒木山の掃除や整備作業と合わせて、北房公民館講座の「まに大付属ふるさと研究所」の講座に多くの会員が参加しました。
十一月九日(土) 午後
西塚の柴掻き
(会員十一名・まに大講座生四名・市二名)
十一月十六日(土) 午後
西塚の柴掻き・東塚前方部に階段の設置



(設置の階段)



員十六名(会
・市二名)刈り
(柴掻き・草

現場に立つ

平成三（一九九一）年二月末から約一ヶ月、定北古墳の第一次発掘調査が行われた。

それに先だって、岡山大学考古学研究室から担当者が北房町の教育委員会に來られて、

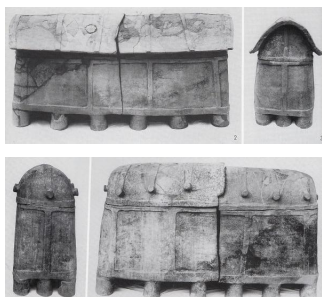
「考古学研究室は予算が少なく困っている。定北古墳の調査に百万円の資金支援を願いたい。」

といった旨の申し出があった。そこで、

「古墳の調査が終わった段階で、出土品を北房町へ戻す。」

という確約書を交わして予算化した。そうした経緯で、現在ふるさとセンターへ定北古墳の出土品が帰っている。

（定北古墳出土の陶棺）

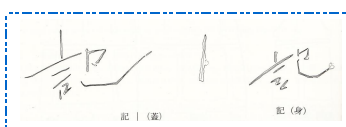


《切妻型》

《亀甲型》

る。

さて、定北古墳の調査が始まり、切石積み石室で、墳丘は大型の三段築成であること、四基の陶棺のうちの一基には、身と蓋に「記」の字が刻まれているなど、予想を超える成果が得られた。



（3号陶棺に刻まれていた記の文字）

そんなある日、発掘調査中の定北古墳へ上っていくと、調査を担当されていた新納泉先生が下りて来られ、「あなたが提唱された『西の明日香村』がいよいよ現実味を帯びてきましたよ。」

とにこにしながら言われた。私は素直に嬉しかった。

その後、平成二〇（二〇〇八）年十二月、大谷・定古墳群の国指定を記念して「定古墳群の発掘と七世紀の北房―蘇我氏と密接な地か―」と題して新納先生が講演し、

「蘇我氏と密接なかわりのある有力者が北房に居り、吉備を支配下に置いていたのではないか。そ

ういう点からも、当時の歴史を考える上で、北房の地や古墳群の持つ意味は大きい。」

と話された。その際、私は大谷一号墳と定古墳群の被葬者の関連について質問した。新納先生は、

「西の明日香村を提唱した先見のある平松さんの質問だが。」

と言って答えて下さった。先生の記憶の中で、久松は何時しか平松に変わっていた。

定北古墳調査の後、定東塚・定西塚の発掘調査が数年にわたり行われた。

定古墳群の発掘調査により、大和の王権を支え、飛鳥の都を造った実力者の蘇我氏の勢力が北房へ進出し、吉備国と出雲国に影響を与えたとも考えられ、定古墳群が彼らの数代にわたる墳墓である可能性を秘めていると真剣に考えている。

「西の明日香村が現実味を帯びてきた。」

と言われた新納先生もそうした物語を描いておられたのかも知れない。

（久松秀雄）

重要施設を支えた版築の技法

我が国で最初に建立された寺院は、奈良の明日香村に在る飛鳥寺（法興寺）で、五九六年に蘇我馬子が建てたと言われています。

この建築は、百済の工人たちによって成されたとき、その際「版築」という土木技術がもたらされています。猪熊兼勝先生（国立奈良文研）は、平成七（一九九五）年のシンポジウム「終末期古墳と大谷一号墳」で版築について次のように説明されています。

「版築は両側にワク板を横に立て、その中に柔らかい粘土と乾燥した土を互層に固め、直径五センチぐらいの棒で叩き占めたものです。古墳の場合は板を入らずに、土饅頭型にしていきます。」と。

大谷一号墳の墳丘も版築で築かれています。また、吉備雅武彦命の御廟跡の伝承がある郡神社の本殿の土壇の版築も立派で、猪熊先生が

「大谷一号墳のものと比べ

て遜色ない。」

と言われています。



（郡神社本殿の土壇）

郡神社に近接して在ったとされる英賀郡衙や赤茂の英賀廃寺でも版築らしき遺構が指摘されています。なお、総社に在る鬼ノ城の大きな版築土塁は有名です。このように、七世紀の後葉には、この地方でも最新の土木技術版築が重要施設を支えていたのです。身近なことでは、ため池の築堤で行われた「千本づき」も、版築の応用と言えるでしょう。



（飛鳥寺）